

## 独思録：「正月に思う」(1/3)

小西 秀俊

[esq-info@esquare-kamakura.net](mailto:esq-info@esquare-kamakura.net)

1月4日に開かれた2010年最初の取引となる東京株式市場の大発会で、終値が昨年末に比べ108円35銭(1.03%)高い1万0654円79銭と、昨年8月に付けた高値を上回り、08年10月3日以来の高値水準を回復しました。

株高の要因は、一時1ドル=93円台まで為替相場の円安・ドル高が進み、企業業績の採算改善期待から輸出株を中心に幅広い買いが入ったことや、日航への日本政策投資銀行の融資枠が2000億円に拡大されたことから、日本航空株が大商いとなったことのように、年初とあって市場参加者が少なく、全体の売買は低調だったそうで、今後の景気を見極めるには乏しい状況であったようです。

正月といえば、文豪夏目漱石や、文人で科学者でもある寺田寅彦が次のようなエッセイを残しています。

夏目漱石は、

「元日を御目出(おめで)たいものと極(き)めたのは、一体何処(どこ)の誰か知らないが、世間が夫(そ)れに雷同(らいどう)しているうちは新聞社が困る丈(だけ)である。雑録でも短篇でも小説でも乃至(ないし)は俳句漢詩和歌でも、苟(いやし)くも元日の紙上にあらわれる以上は、いくら元日らしい顔をしたって、元日の作でないに極(き)まっている。尤(もっと)も師走(しわす)に想像を逞(たくま)しくしてはならぬと申し渡された次第でないから、節季(せつき)に正月らしい振をして何か書いて置けば、年内に餅(もち)を搗(つ)いといて、一夜明けるや否や雑煮(ぞうじ)として頬張(ほおば)る位のものには違ないが、御目出たい実景の乏しい今日、御目出たい想像などは容易に新聞社の頭に宿るものではない。それを無理に御目出たがろうとすると、所謂(いわゆる)太倉(たいそう)の粟(ぞく)陳々相依(ちんちんあいよ)るといふ顔(すこぶ)る目出度(めでたく)ない現象に腐化して仕舞(しま)う。」(青空文庫、夏目漱石の「元日」より)

と皮肉っぽく「元日」を迎えています。

一方、寺田寅彦は、

「数年前までは正月元旦か二日に、近い親類だけは年賀に廻ることにしていた。そうして出たついでに近所合壁(かっぺき)の家だけは玄関まで侵入して名刺受けにこっそり名刺を入れておいてから一遍奥の方を向いて御辞儀をすることにしていたのであるが、いつか元旦か二日かが大変に寒くて、おしまいには雪になったことがあって、その時に風邪を引いて持病の胃に障害を起したような機会から、とうとう思い切って年賀廻りを廃してしまった。すると、その翌年は正月がたいそう暖かくて廻礼廃止理由の成立が少々怪しくなったようであった。

年賀に行くと大抵応接間か客座敷に通されるのであるが、そうした部屋は先客がない限

り全く火の気がなくて永いこと冷却されていた歴史をもった部屋である。這入（はい）って見廻しただけで既に胸ぶるいの出そうな冷たさをもった部屋である。置時計、銅像、懸物、活花（いけばな） ことごとくが寒々として見えるから妙である。」（青空文庫、寺田寅彦の「新年雑俎」より）

と不精なことを言っています。

では、私はと言いますと、歳のせいかわ昔を振り返っています。2003年の正月、このホームページを立ち上げて最初の正月のことです。（HP立上：2002年5月）

当時の毎日新聞が、主要企業に出したアンケート調査を取り上げ、  
「主要企業アンケートによれば、今年は、企業の業績は向上するが日本の景気は良くはならない。見方を変えると、リストラにより企業は持ち直すが、国民の消費は伸びない。即ち、国民の耐乏生活によって企業は栄え、国力は益々衰えるということでしょうか？」

このような背景でも、小泉内閣に落第点を付けたのは一割しかないとはどういうことでしょうか？ 結局は、小泉内閣の無策・丸投げを放置し、景気がよくなるのは、株価が下落して不良債権が増え、消費が拡大しないからだと責任を国民に転嫁し、税金やリストラなどの負担を国民に押し付けていることを語っているのが今回の主要企業アンケートではないでしょうか？ ちょっと斜に構え過ぎですか？」

と生意気なコメントを残していました。

7年前の正月も、今年の正月と同様、国民の耐乏生活によって企業は栄え、国力は益々衰えるという構図だったようですが、今年と異なり、景気の先行きには不安を持っていたようですが、アンケートに答えた企業の7割が業績向上に自信を持っていました。

#### < 夏目漱石 (1867-1916) >

小説家、評論家、英文学者。俳人（俳号は愚陀仏）。本名、金之助。江戸の牛込馬場下横町（現在の東京都新宿区喜久井町）生まれ。森鷗外と並ぶ明治・大正時代の文豪。

大学時代に正岡子規と出会い、俳句を学ぶ。帝国大学（後の東京帝国大学）英文科卒業後、松山中学などの教師を務めた後、イギリスへ留学。

帰国後東大講師を勤めながら、『吾輩は猫である』を雑誌「ホトトギス」に発表。これが評判になり『坊つちやん』『倫敦塔』などを書く。その後朝日新聞社に入社し、『虞美人草』『三四郎』などを掲載。当初は余裕派と呼ばれた。

その他『行人』『こゝろ』『硝子戸の中』『明暗』など。



#### < 寺田寅彦 (1878-1935) >

随筆家、地球物理学者。東京市麹町区（現在の千代田区）生まれ。東京帝国大学卒。

航空研究所、理化学研究所、地震研究所、東京帝国大学（教授）等に所



属、大正 12 年（1923）45 才の時、関東大震災に遭遇し、火災旋風等の調査に従事。漱石の門下生でもあり、吉村冬彦の筆名で数多くの随筆を書いている。

「天災は忘れた頃に来る」という言葉を言い出したのは寺田寅彦であるといわれている。

作品に『漫画と科学』『科学と文学』『西鶴と科学』『珈琲哲学序説』『神話と地球物理学』などがある。

#### 毎日：「主要企業アンケート 業績向上に 7 割が自信 デフレ対策には不満」(03/1/4)

03 年の日本経済を探る毎日新聞の主要企業アンケートが 3 日まとまった。今年の日本の景気を「悪くなる」と答えた企業が 3 割を占めたものの、自社の業績は「良くなる」と答えた企業が 7 割にのぼり、景気低迷が続くなかでも、多くの企業は業績向上に自信を見せた。また、小泉内閣の経済運営に 100 点満点で評価を求めたところ、60 点未満が 4 割を超え、「デフレ対策が不十分」などの厳しい指摘が多かった。

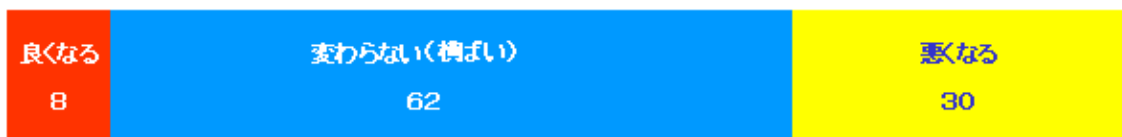
アンケートは昨年 12 月、上場企業中心に行い、112 社が回答した。今年の景気が「良くなる」と答えた企業は 1 割足らずで、「変わらない」「悪くなる」の合計は 9 割を上回り、景気回復には悲観的な見方をしている。半面、今年の業績は「良くなる」が 72%、「変わらない」が 25%だが、昨年同様、リストラ主導で業績回復を目指す動きが強まると見られる。

小泉内閣の評価では、70 点以上の「及第点」は 2 割強。50～60 点台が 6 割を占め、50 点未満の「落第点」をつける企業も 1 割強あった。最高点は 90 点（1 社）で、「構造改革に取り組んでいるため」を理由にあげた。一方、最低は 20 点（3 社）で、「デフレの原因を把握しておらず、対応策も支離滅裂」との厳しい批判もあった。全体として政府の経済政策への批判が高まっていることをうかがわせた。

物価下落と景気低迷が同時に進む日本経済のデフレ状況には、「1、2 年は続く」との答えが半数を占め、「数年以上長期化する」の 4 割と合わせ、大半の企業が中・長期的にデフレが続くと見ている。抑止策は、「大規模減税」「不良債権処理と金融安定」をあげる企業が多かった。

今年 3 月末の日経平均株価予測は、9000 円台が 6 割で、8000 円台が 4 割弱。8000 円割れの悲観的な見方は 2 社しかなく、1 万円の大打撃の楽観予測も 1 社だけだった。

#### 今年の景気予測(2003年)



### 毎日：「主要企業アンケート 景気「足踏み」過半数、回復見通し3割」(1/4)

毎日新聞は、昨年末、全国主要企業119社を対象に景気動向などを聞くアンケートを実施した。景気がこの先「良くなる」との回答は全体の29・4%の35社にとどまり、56・3%にあたる67社が「足踏み(横ばい)」と回答。08年秋のリーマン・ショック後の最悪期からは脱したものの、内需低迷やデフレ、円高の進行などで、企業の間で「景気は踊り場に入る」(大林組)との見通しが広がっていることをうかがわせた。さらに、「悪化する」との回答も13・4%にあたる16社に上り、景気低迷・悪化で「二番底」に陥ることへの警戒感も強まっている。

アンケートは昨年12月上旬から中旬にかけ、主要119社の社長、会長を対象に実施した。

景気の現状については、76社(63・9%)が「足踏み(横ばい)」と回答。「緩やかに悪化」「悪化」も計13社(10・9%)あり、「緩やかに回復」は30社(25・2%)にとどまった。

また、景気の先行きを「良くなる」と予想した35社に、景気の本格回復時期を聞いたところ、約6割が「10年度下期」、2割が「11年度以降」と回答。「10年度上期」が最も多かった昨年7月のアンケートと比較すると、本格回復を見込む時期が後ずれしている。

一方、10年度の自社業績については、電機や素材など輸出企業を中心に計50社(42・0%)が「好転」「やや好転」を見込む一方、食品や流通を中心に「横ばい」(15社)や「やや悪化」(6社)を予想する企業も計2割近くに上った。

リーマン・ショック後の世界的な経済危機で、日本企業は在庫調整やリストラを加速。エコカー減税やエコポイント制度など政府の景気刺激策や輸出の復調で、製造業を中心に昨年7～9月期以降、企業業績は持ち直してきている。しかし、長引く内需不振で非製造業は業績悪化が続いており、デフレや円高で、製造業でも景況感は大幅には改善していない。このため、新年の景気について「回復基調自体は崩れなくても、海外の景気対策打ち切りに伴う輸出鈍化などで一時的に踊り場状況となる」(三菱UFJフィナンシャル・グループ)との見方が広がっている。

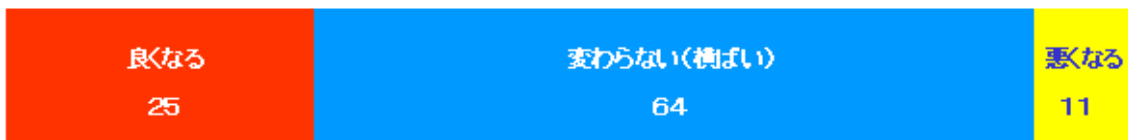
経済政策に「期待」24%

鳩山政権の経済政策に対しては、全体の約4分の1に当たる29社が「期待している」と回答、「期待していない」(14社)を上回った。ただ、暫定税率廃止で首相や閣僚の発言が二転三転するなど「政策の方向性がはっきりしない」(食品)ことから、約半数(55社)は「どちらとも言えない」と回答した。

期待するとした企業からは「自民党政権下でできなかった政策の実現を」(通信)と改革実行を求める声があった一方で、期待していないとした企業からは「所得の直接補償などバラマキ(政策)も多く、何を柱に経済成長を図るのか、指針が無い」(JR東日本)との厳しい声もあった。

一方、温室効果ガス25%削減という政府の目標については、「日本が国際的な主導権を發揮する好機」(機械)など、約3割に当たる36社が支持を示し、「支持しない」の23社を上回った。ただ、経済への悪影響を抑える制度設計を政府に求める声があった。

#### 今年の景気予測(2010年)



### 春秋：「正月という妙薬」(1/1)

まずは遊びぞめを。1950年元旦、「若返りの妙薬」のお年玉が政府から出たとの記事が小紙に載った。なんのこと？ピンとこられたかどうか。じつは、年齢の言い表し方を「数え」から「満」に改める法律が施行されたのである。

生まれて1歳、あとは新年に齡（よわい）を積んでいく数えに比べ、満だといつも1つか2つ少ない。なるほど若返るが、除夜の鐘を聞きながら「年ひとつ老いゆく宵の化粧かな」（高井几董（きとう））と詠んだ思いからは遠くなる。コラムニスト山本夏彦は、満で数えるという余計なことを始めて正月は旗色が悪くなったと嘆じた。

60年たって干支（えと）が庚寅（こういん）から庚寅に一回りしてみれば、当たり前になった満年齢にはもう若返りの靈験はない。政権交代になった鳩山内閣に別のお年玉をねだろうにも、国の懐具合が気になる。それでも、正月はやはり正月である。きょうは折しも満月。厳しい寒気の中、晴れた地では未明に部分月食も拝めたはずだ。

初日の出前の天空からのお年玉に力を授かった人もいるだろう。のんびんだらりと続く日々を想像すれば、ありがたさが分かる。「一塊の光線（ひかり）となりて働けり」（篠原鳳作）。そんな厳しさにあこがれつつ、ふっと息もつきたい。そして2010年に歩き出す。正月という妙薬は、その「ふっと」を与えてくれる。

#### <感想>

確かに経済などには正月は「若返りの妙薬」ですね。

しかし、我々の年代にとっては、一休禅師の「門松は 冥土の旅への一里塚 めでたくもあり めでたくもなし」の句の方が身に沁みます。

#### <高井几董(1741-1789)>

江戸時代中期の俳諧師。京都生まれ。夜半亭三世。別号に晋明、高子舎、春夜楼など。

父に師事し俳諧を学び、初号を雷夫と称した。明和7年（1770年）30歳の時、与謝蕪村に入門、安永7年（1779年）には蕪村と二人で大坂・摂津・播磨・瀬戸内方面に旅する。

天明3年（1784年）に蕪村が没すると蕪村句集を編むなど俳句の中興に尽力した。

京都を活動の中心に据えていたが、天明5年（1785年）蕪村が師である早野巴人の「一夜松」に倣い「続一夜松」を比野聖廟に奉納しようとしたが叶わず、その遺志を継いで天明6年（1786年）「続一夜松」を刊行。

作品に『日発句集』『初懐紙』『其雪影』『あけ鳥』『井華集』『続一夜松』など。



### 天声人語：「書物との邂逅」(1/3)

日本の子どもたちは冬休みのさなかだろうが、古い時代の中国には「冬学(とうがく)」なるものがあったそうだ。農村の子らを農閑期に学ばせるために、冬にだけ開かれる寺子屋のようなものだったらしい。

かの国では、読書にふさわしい季節も冬とされていた。本を読むのに適した「三余(さんよ)」という余暇があって、雨の日と夜、それに冬のことを言った。それなら冬の夜は、またとない好機ということになるろうか。江戸時代の日本の漢詩人、菅茶山(かん・さ・ざん)に「冬夜読書」という作がある。

「雪は山堂を擁して 樹影深し」に始まり「一穗(いっすい)の青灯 万古の心」で終わる四行の絶句は、雪の夜に書物をひもとく喜びを伝える。「一穗の青灯」は燭台(しょくだい)の明かり。「万古の心」は書物の伝える古人の思い。歌人の土岐善麿はこのくだりを「ともしびに面影立つや昔びと」と風雅に意識している。

元日の小紙の別刷り特集が、今年は「国民読書年」だと伝えていた。読むことを通じて豊かな言語力を育むのが目的という。読書は受け身に見えて、実は脳をフル回転させる営みであるらしい。

昨今、言葉で感情を表せずに「キレル」子が目立っている。背景には言語力の低下があるとされる。一方で頼もしい傾向もある。図書館を利用する小学生は、07年に1人あたり約36冊の本を借りていた。これは過去最多という。

巣ごもり派も多かった年末年始、「読み納め」や「読み初(ぞ)め」を楽しまれた方もおられよう。人との出会いはすてきだが、書物との邂逅(かいこう)も捨てがたい。一生ものの一冊に会える読書年であればいい。

#### <感想>

昨今、小説を読むことが減りました。一つには、新聞も同じですが、ホームページで事足ります。

パソコンの前に坐って仕事(?)する前に、4大紙のホームページを開き、時には、続いて青空文庫で読書らしきことをしています。

昔は 文学全集を読み耽っていたこともありましたが、その全集も、今やインテリアに化けてしまいました。

#### <菅茶山(1748-1827)>

江戸時代後期の儒学者・漢詩人。諱は晋帥(ときのり)。字は礼卿。通称は太仲・太中。備後国安那郡川北村(現広島県福山市神辺町)出身。

京都的那波魯堂に朱子学を学び、和田東郭に古医方を学ぶ。京都遊学中には高葛陂の私塾にも通い、与謝蕪村や大典顕常などと邂逅。

1781年(天明元年)頃、神辺に私塾黄葉夕陽村舎を開き、皆が平等に教育を受けること



で、貧富によって差別されない社会を作ろうとした。

1796 年（寛政 8 年）塾は福山藩の郷学として認可され廉塾と名が改められ、頼山陽・北条霞亭など多数輩出。

詩集『黄葉夕陽村舎詩』『菅茶山 頼山陽詩集』『筆のすさび』など。

### 編集手帳：「10年前は」(1/3)

西暦で2010年という区切りの良い年を迎えると、さて10年前はどうしていたかな、その10年前は...と思いが巡る。前の区切り良き年は、前年の大晦日（みそか）から夜通し待機して、コンピューターの混乱に備えていた。

結局、「2000年問題」で深刻なトラブルは起きず、最も大きな影響はと言えば、新聞記者同様に企業や官庁で大勢の人が警戒出勤したため、初詣でや行楽を近場で済ませる人が増えたことだった。今思えば笑い話である。

1990年を迎えた時は兜町が沸き立っていた。前年末の大納会で日経平均株価は史上最高値の3万8915円をつけた。それが大発会から奈落へ向かうような値下がりが始まる。あの正月が日本経済の絶頂だった、と、これも今だから分かることだ。

政権交代の後で初めて迎えた年の初めは、不安と期待が交錯している。この正月を10年後はどう振り返るのか、20年後は...と考えてしまう。不安は杞憂（きゆう）に終わるかもしれないし、期待は裏切られるかもしれない。

盃（さかずき）を傾けつつ、未来から原稿を送れたらと夢想する。見通しと曜日の位置は良くない新年、お屠蘇（とそ）気分は三が日まで。

#### <感想>

工業会の委員会でこのコラムのようなことが議題となり、コンピューターの混乱の統計をどのように採集し、まとめ、開示するか打ち合せをし、結局、このコラムのように大した混乱はなかったことを思い出しました。もう10年になるのですね。

#### <2000年問題>

コンピューター西暦2000年問題。年号を2桁で管理しているコンピューターが西暦2000年を1900年と誤認してしまい、処理を続行できなくなる問題のこと。

コンピュータープログラムの中には記憶容量の節約のために日付データの年号部分を2桁で管理しているものがあり、西暦2000年、すなわち内部コード00年を1900年と誤認してしまい、データを正しく処理できなくなったり、一部のコンピュータープログラムで「00」を特殊な意味を持つコードと規定していたため、西暦2000年にどのような動作をするか予想できなかった。

結局は、各企業や官庁の対策が奏功し、西暦2000年を迎えても、小さなトラブルは頻発したが、社会に大きな影響を与えるような大規模な問題は発生しなかった。



### 余録：「一年の計」(1/3)

「夏に始めた禁煙を続行中」。知人から久しぶりに便りが届いた。あの愛煙家がついにと思うと、時代の流れを感じる。

今年の抱負に「禁煙」を掲げた人も多いのではないか。たばこ税の引き上げは、1箱で100円程度の値上げにつながる。きっかけを求めている人にはチャンスだ。「今年こそダイエット」という人もいるだろう。危ないのは、お正月の誘惑で禁煙もダイエットも「三日坊主」に終わることだ。

どうすれば新年の決意を守れるか。英国の心理学者、リチャード・ワイズマンさんは、700人の「成功と失敗」を基に「年初の抱負を実現するコツ」を紹介している。目標を小分けにして一歩ずつ進める。目標は達成度が測定できるものにする。自分の目標を友達や家族に話す。

何かに似ていると思ったら、温室効果ガス削減の目標の立て方だ。2050年に世界で半減させるため、20年までの中期目標の実現をめざす。昨年末の国際交渉では、主要排出国の削減目標が「測定・報告・検証」できるかどうかが大きな議論になった。各国が今月末までに中期目標を世界に告げることも決まっている。

日本は「各国の公平な参加を条件に25%削減」との中期目標を崩していない。これに対し、産業界を中心に「高い目標を見直そう」という声がある。「国際合意の方式自体に無理がある」との指摘も聞く。

ワイズマンさんのコツには「直前に決めるな」との分析もあり、あわてて目標を変えるのは考えものだ。一方で「過去の決意にこだわるな」との項目もあり、合意方式の見直しは必要かもしれない。「一年の計」ならぬ「十年、百年の計」だけに、今年も議論が沸騰しそうだ。

#### <感想>

最近何十年か「一年の計」など立てたことはあっただろうか。

年末年始が「一年の計」など立てる隙のないほど忙しかったからではない。ただ、そんなことを考えたこともなかったであろうと思われます。

これからの残り少ない人生、秦の始皇帝と同じように、不老不死の計画でも考えてみま。何しろ、徐福というペテン師が、始皇帝を騙し、一路船で不老不死の薬がある遙か東の国を目指し、無事にたどり着いたとされるその国が、日本であったと言います。

その日本に生まれ住んでいる我々としては不老不死を考える義務があります。

#### <リチャード・ワイズマン(1966-)>

心理学者。英国ハートフォードシャー大教授。

プロのマジシャンから心理学的現象の研究に進み、エディンバラ大学で博士号取得。



サイエンスコミュニケーションの専門家として研究・教育にあたり、多くのTV番組に出演、ブロードウェイでの舞台の制作など幅広い活動で知られる。

著書に『その科学が成功を決める』『Qのしっぽはどっち向き?3秒で人を見抜く心理学』『運のいい人、悪い人 運を鍛える四つの法則』『運のいい人にはワケがある! 運を鍛える《ゴリラ》の法則』など。